

1996.2.24

読売 俳壇

鮒買イタチのやうに確かめに

矢島 渚男 選

北本市 萩原 行博

【評】イタチは小さく、しなやかで美しいが、癡猛で鶏小屋などを一夜で全滅させてしまふ。それに畏を仕掛け様子を見に行く。音を立てないように、イタチのように近づくと、巧みなりフレイムである。

キューピーのピンクのドレス毛糸編む

宮城県 梶原 京子

【評】小さい子のためかキューピー人形に着せるドレスを編んでいる。ピンクという幸せな色が暖かい。小さくて難しいが満たされた気持ち。SLの煙おきゆく冬日和

香取市 嶋田 武夫

【評】中七がいい。ぼっぼ、ぼっぼというように、空に置いて行く。SLを詠った秀作ではなからうか。吹き溜まりなきビル街の落葉かな

「飲みなんしょ」樽酒香る秋祭り

東京都 吉村 恵子

蚕豆は祭りの後に植ゑよとて

観音寺市 細川千華子

脱ぎ履きの易きゴム長落葉焚

鈴鹿市 岩口 巳年

温きまま包まれ届く寒卵

甲府市 戸沢 茂紀

オフサイド知るも知らぬも熱き冬

東京都 福島 隆史

原敬の墓所の山門時雨けり

滝沢市 小田佐枝子



宇多喜代子 選

にぎやかに病の話吊し柿

東京都 駒形 光子

【評】吊し柿の下に集まっている人達それぞれが自身の病歴や持病について話している。まるで楽しいことでも話しているかのようである。白菜の四分の一の光かな

鹿嶋市 津田 正義

【評】小人数にとって白菜の一つは大きすぎる。そこで四分の一サイズが重宝される。大きい白菜に刃を入れて四つに切ったその一つに焦点をあてた句。

返事するばかりの母と日向ぼこ

国分寺市 野々村澄夫

【評】高齢の母と日向ぼっこをしている。その心地よさに、ぼんやりしているお母さん。何を話しかけてもウンウンというばかり。切干と同じ日向に濯ぎもの

大分市 飯田 東夷

戦前を戦後を生きて又冬へ

上尾市 山田 正雄

大利根を紅葉前線下り来る

鎌ヶ谷市 三好 弘国

冬仕度いま太い針太い糸

東京都 斎木百合子

洗面に湯を使ひけり今朝の冬

神戸市 大浜 義弘

冬の日や妻とベンチの動物園

日高市 田辺 英男

冬薔薇次の黄色を膨らます

防府市 篠原 智子



正木ゆう子 選

とりあへずシリウスを確かめる癖

横浜市 前島 康樹

【評】寒天にまず確かめるのは青い星シリウス。オリオン座もスバルもそこから見つけてゆく。星の華やかな冬は、人が最も夜空を仰ぐ季節。卑近な「癖」の語に、親しみが湧く。九十九里葱に潮味すると言ふ

山武市 川島 隆

【評】吹き付ける潮風が飛沫を運ぶのか。それとも土のせいかな。いづれにしてもミネラル豊かな海の塩味は、葱を甘く美味しくするだろう。干蒲団ただそれだけの平和かな

土浦市 今泉 準一

【評】お日様が出て、蒲団を干す。洗濯物を干す。贅沢でも何でもない当たり前のこと。ただそれだけのことが、世界中で出来ますように。終の風にかくれて来る香り

東大阪市 木田 博幸

千住まで上りつめたる都鳥

越谷市 小林ゆきお

大連の冬ざれに酌む紹興酒

横浜市 宮内 禎二

狸六の町にささつと時雨かな

下妻市 神郡 貢

短日や改札口はガード下

東京都 六笠 有子

曜変天目の如くに冬星座

東京都 神通美美代

木枯しや等圧線は縦もやう

横須賀市 大塚遊球子



小澤 實 選

あんパンは漚餡が好き冬生まれ

新潟市 古泉 浩子

【評】餡の好みもいろいろで、あんパンの場合は漚餡が好きだという。その好みと冬生まれとは、直接関係がなく、謎を誘うのがおもしろい。漚餡が新潟の冬空を思わせもする。カラス語の分かる男と日向ぼこ

柏市 藤嶋 務

【評】冬の日だまりであたたまりつつ、隣に座る男のカラスの言葉の翻訳を聞いている。不思議な世界にぐっと引き込まれてしまいたいそう。柚湯して母の分厚き爪を切る

下田市 森本 幸平

【評】母を柚湯にゆっくり入らせて、足の分厚い爪を柔らかくした上で、切ってやっている。柚の香りがあたりを漂っていることだろう。ドローンに一瞥かれて鷹悠悠

長野県 小沢 隆

手の平で綿虫ちよつとひと休み

相模原市 斉藤あけみ

腹巻の秘薬みせあふ年忘

津市 中山 道春

鋤焼にボジョレ・ヌーヴォー栓を抜く

武蔵野市 相坂 康

鱈見ゆ鮭の皮よりつくる靴

羽曳野市 鎌田 武

鯛焼きを買ひに出たまま三時間

横浜市 菅沼 葉二

犬の糞持ち帰る人小春風

佐野市 桑原 博